

令和6・7年 研究主題

身近な自然に興味や関心をもち、  
関わって遊ぶ中で、好奇心や探究心を育む

第5回 研究部会 令和8年3月4日（水） 会場：伝法幼稚園

- 内容
- ・各園より研究の取組発表
  - ・研究討議（この研究を通して学んだこと）
  - ・指導講評

## 園の取組について

- ・1年目の研究で自然への関心が高まっている幼児が、2年目になり新たに自然と関わって好奇心や探究心を育てていく保育を考えた。成功ばかりでなく、上手くいかなかったことも含め、「なんでだろう」「不思議だな」と教師も一緒に考えて取り組んだ。
- ・園内の自然マップを作成し、幼児と教師で理解を深めたり、発見カードや視覚物、掲示物を作成したりした。また、振り返りでは実物を使いながら話す工夫をした。これらのことから、いろいろな取組を継続することの大切さを感じた。
- ・園ならではの特色を見直し、見直しをもって保育を行うことを大切にしたい。その中で自然のサイクルを知り、幼児と共に自然を取り入れて遊んだ。ただ、季節に応じた遊びや栽培のタイミングが思ったように進められないこともあった。探究心につなげる難しさを感じた。
- ・園内の環境を知るために、マップの作成や記録をとったことで、季節の変化に気付くことができた。単発な活動にならないように園内外の自然を積極的に取り入れた。そうした結果、身の回りの自然を柔軟に取り入れようとする意識につながった。
- ・園の特色である自然を、教師が意識して保育に取り入れることで、幼児の自然への関心につながり、遊びに取り入れていく姿が見られた。教師自身が自然へのアンテナを張ることで、幼児も見慣れた環境の変化に気付いたり、取り入れていこうとしたりしていた。
- ・研究2年目では、日々の教材研究や保育の見直し、実践記録で自然との関わりを振り返ることで、幼児がより自然へ興味や関心をもつようになった。今後も継続して幼児の育ちを大切にしていきたい。
- ・幼児の一瞬のひらめき・ときめきを大事に、自然を身近に感じられる環境づくりを意識して行った。継続して関心をもてる環境づくりをし、失敗やタイミングを逃したときは環境の再構成を行い、様々な生き物の飼育や掲示物などを工夫した。今後も、教師が心に余裕をもち、幼児の姿に寄り添うことを大切にしていきたい。

- 幼児の様子をよく見て、思いをくみとることの大切さを学んだ。栽培活動を通して、子どもと共に保護者も自然や栽培に対する興味や関心が高まった。そこからさらに、幼児の自然への好奇心や探究心の育ちが見られ、自園の環境を生かすことの大切さを感じた。教師自身が興味や関心をもつことで、幼児の興味や関心も高まり、幼児の好奇心や探究心の育ちにつながることを学んだ。

## 指導講評

講師 大阪市総合教育センター 教育振興担当 基本研修グループ 指導主事

- 2年の研究を終えての本日がゴールであり、明日からの保育のスタートでもあると捉え、教育を進めていってほしい。
- 2年の研究を振り返り、「自然は教材よりも問いを生む相手」であること、「大切なことは結果より幼児たちの遊びが続いていく過程である」ことであると感じられた。
- 探究が育つ循環は、①見とり、②環境、③対話、④記録の共有である。  
教師が幼児の興味や関心を捉えて見とり、素材や場所、時間などの環境を整え、教師と幼児や幼児同士が対話をすることで育っていく。その過程を記録し、次の保育へつなげていくことが大切である。
- 教師の関わりには、以下の3つの大事な役割がある。
  - ①安全、時間、繰り返しできる環境、失敗しても大丈夫であると思えるように「守る」こと
  - ②素材や場所、季節、仲間につなぐなど「広げる」こと
  - ③比べたり、確かめたり、理由に気付くなど「深める」こと
- 問いが生まれる環境として、「繰り返すことができる」「試すことができる」「比べることができる」「続きができる」ことが大切である。
- 研究部の研究を見て改めて、幼稚園と小学校のつながりの大切さを感じた。幼稚園で培ってきた学びの「やってみたい」「もっとしてみたい」「友達と伝え合いたい」という土台を小学校以降の学びへとつなげることが大切である。これまでの育ちの過程を大切に、次の環境をつくり、スタートカリキュラムにもつなげていきたい。



## 学んだこと

- 2年間の研究では、自然環境を通して、好奇心や探究心をもつ幼児の育ちの様子を学ぶことができた。自然は予測できないことも起こるため、そのことも教師が理解し、楽しんで幼児の自然との関わりを保障していくことが大切である。
- 自然との関わりの中で、教師が敏感に季節を捉え、時間や場所を十分に保障していくことで、幼児の遊びが深まり、好奇心や探究心につながっていくことが分かった。これは、他の面での幼児の育ちにも共通する部分があるので、今後の研究でも、教師が興味をもち、見通しをもちながら一緒に取り組んでいくことが幼児の育ちにつながる。